

# 大学生のライフデザインイメージ：看護学科と社会保育学科の比較から

著者	加藤 千恵子, 傳馬 淳一郎, 佐々木 俊子, 刀禰 聡美, 若林 智, 結城 佳子
雑誌名	地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	157-166
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40021941134
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1088/00001818/">http://id.nii.ac.jp/1088/00001818/</a>

## 実践報告

# 大学生のライフデザインイメージ

## 看護学科と社会保育学科の比較から

加藤千恵子<sup>1)</sup>\* 傳馬淳一郎<sup>2)</sup> 佐々木俊子<sup>1)</sup> 刀禰聡美<sup>3)</sup> 若林 智<sup>3)</sup> 結城佳子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 <sup>2)</sup> 名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科

<sup>3)</sup> 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター

キーワード：ライフデザインゼミ 大学生 ライフデザインイメージ

### 1. はじめに

ライフデザインゼミ（北海道・本学コミュニティ教育研究センター主催）の開催は今年で3度目となる。本年は、山田智子（NPO法人子育て応援かざぐるま代表理事）を迎え、講義支援という介入で、主に看護学科2年生と社会保育学科の学生を中心に講義を受けた。山田氏は、子育て支援を長きにわたり行っており、その知見を講義していただいた。その講義を受けて、アンケート調査を行った。アンケートで得られた結果から、大学生のライフデザインイメージの一端を明らかにしたいと考える。

### 2. 結果

ライフデザインゼミの参加者はライフデザインゼミの参加者は、合計 201名（男22、女179）で、内訳は、一般6名（男3、女3 1名のみ下川町）、教職員 8名（男2、女6）、学生1K47名（男5、女42）、2K49名（男5、女44）、4K2名（女2）、2H42名（男4、女38）、3H46名（男3、女43）4S1名（女1）であった。アンケート回収率は90.0%（181/201）であった。

参加した大学生の年齢は19.9±2.3歳であった。以下、学科別で報告する。

#### 1) 少子化問題に関して

80%の者が非常に問題であると捉えている（図1）。

#### 2) 結婚し、子どもを持ち、親となることに関して

「とても思う」とした者が、保育学科は61.2%（52/85）、看護学科は53.2%（50/94）が結婚し、子どもを持ち親になることをとても思考している（図2）。

#### 3) 親になる理由について

自分の家庭を持つと答えた者が、保育学科63.2%（48/76）、看護学科61.5%（48/78）、「子どもが欲しい」とした者が、保育学科76.3%（58/76）、看護学科60.3%（47/78）であり、保育学科の方が「子どもが欲しい」とした割合が有意に高かった。

「好きな人と暮らす」とした者が保育学科35.5%（27/76）、看護学科30.8%（24/78）であった。親のように生きるとした者が保育学科1.3%（1/76）、看護学科20.5%（16/78）と看護学科の方が親のように生きるとした割合が有意に高

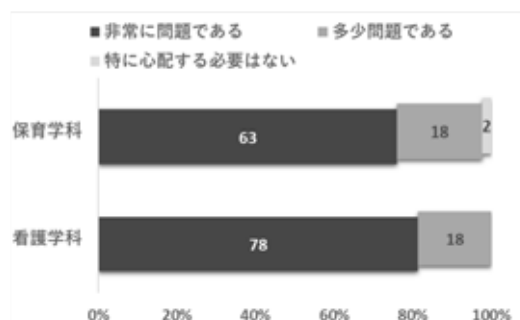


図1 少子化問題について

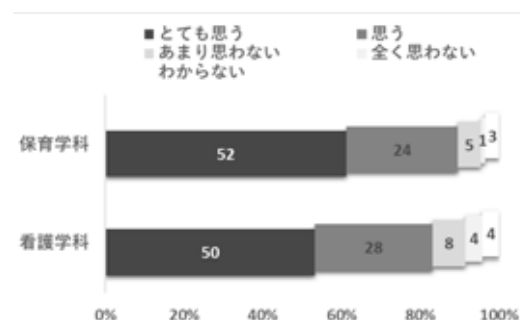


図2 結婚し、子どもを持ち、親となること

かった（図3）。

親にならない理由では、自由でなくなる、他人と暮らすのが面倒、自由にお金が使えないがあった（図4）。

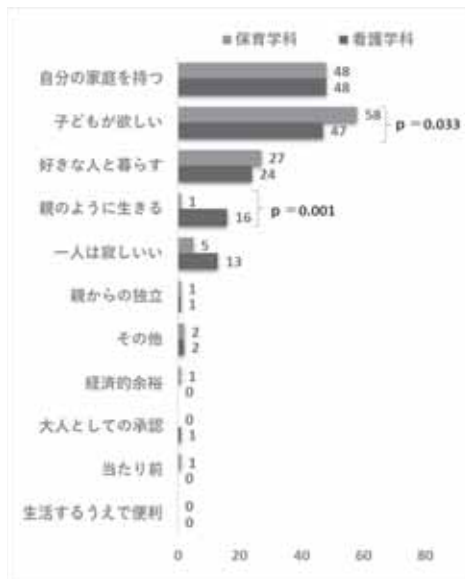


図3 親になる理由

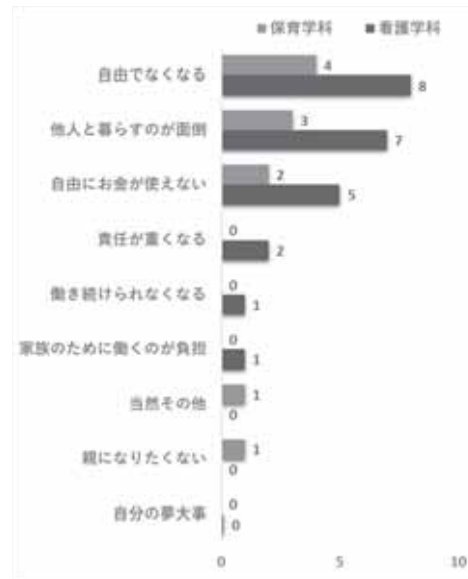


図4 親にならない理由

#### 4) 赤ちゃんのふれあいの機会に関して

看護学科に比べ、保育学科の方が、赤ちゃんとのふれあいの機会がある割合が高かった(p=0.004)（図5）。

ふれあいの時期は、中学生、高校生の時期は、保育学科に比べ、看護学科の方が有意に高かった。高校卒業以降は、看護学科に比べ保育学科の方がふれあう割合が有意に高かった（図6）。



図5 赤ちゃんとのふれあいの機会

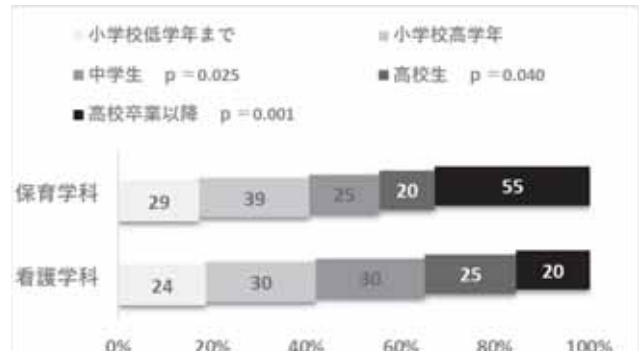


図6 赤ちゃんとのふれあいの時期

#### 5) 現在の育児環境に関して

育児環境に関して、育児休業のとれる職場環境、育児と仕事の両立に関して、配偶者や家族の理解や援助が不足していること、保育所や保育サービスが不十分であること、職場の復帰や再就職の困難、病児を預かる保育施設の不足があげられた（図7）。

#### 6) 将来の家庭と仕事のあり方に関して

将来結婚し子どもを持ち夫婦で協力して育てるとした者が保育学科 76.2%

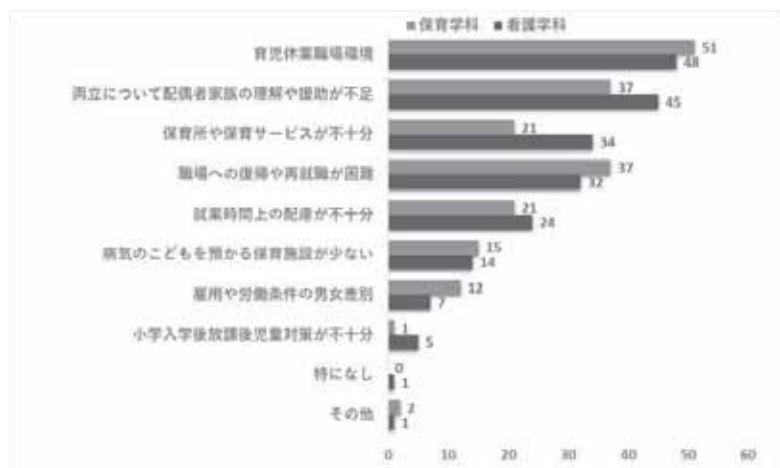


図7 育児環境について

(64/84)、看護学科 72.9% (70/96) であった (図 8)。

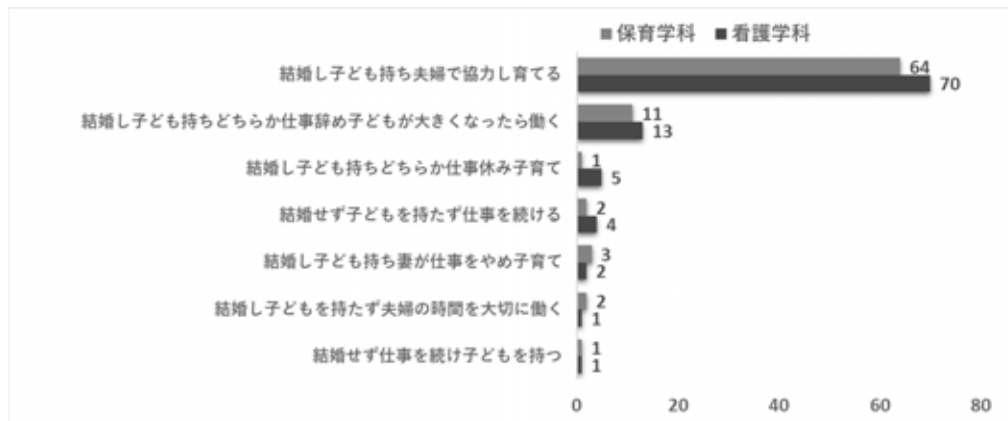


図 8 将来の仕事と家庭のあり方

### 7) 育児のイメージ (図 9)

主な育児のイメージは、責任、楽しい、喜びであった。

保育学科に比べ看護学科の方が「忍耐」とした割合が有意に高かった ( $p=0.002$ )。

看護学科に比べ保育学科の方が「不安」とした割合が有意に高かった ( $p=0.003$ )。

### 8) 子どもが育つために大切なこと

親の子への愛情、夫婦の協力、安定した収入が挙げられた。

保育学科に比べ看護学科の方が「安定した収入」とした割合が有意に高かった。

看護学科に比べ、保育学科の方が「子育てに理解のある職場」「生き方、働き方を相談できる大人がいる」「隣近所、地域の人の子への思いやり」とした割合が有意に高かった (図 10)。

### 9) 職場選択に影響する要因 (図 11)

主な職業選択に影響する要因は、年収、人間関係、労働時間と休日休暇、仕事と家庭の両立であった。

看護学科に比べ、保育学科の方が「仕事の内容」とした割合が有意に高かった。保育学科に比べ看護学科の方が「会社の規模」とした割合が有意に高かった。

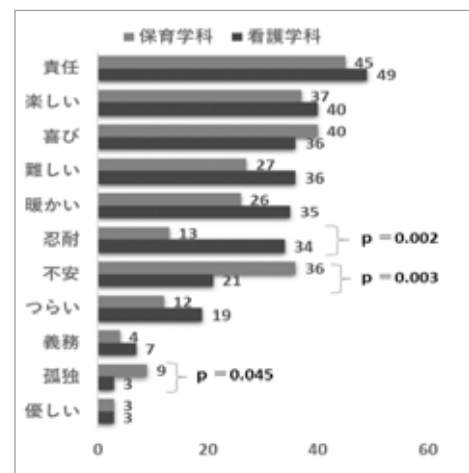


図 9 育児のイメージ

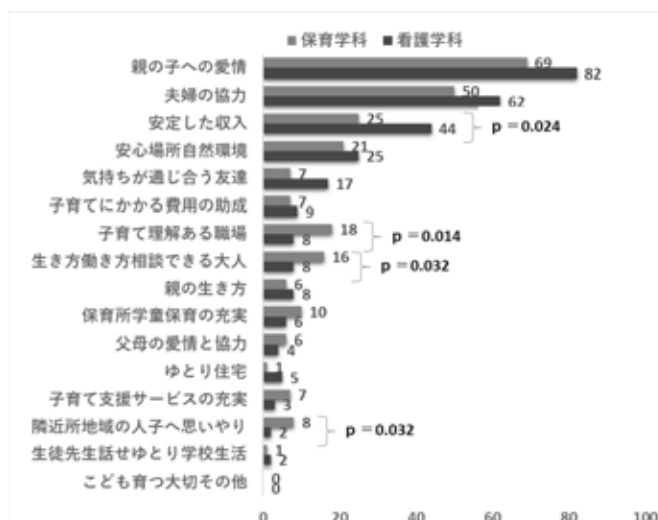


図 10 子どもが育つために大切なもの

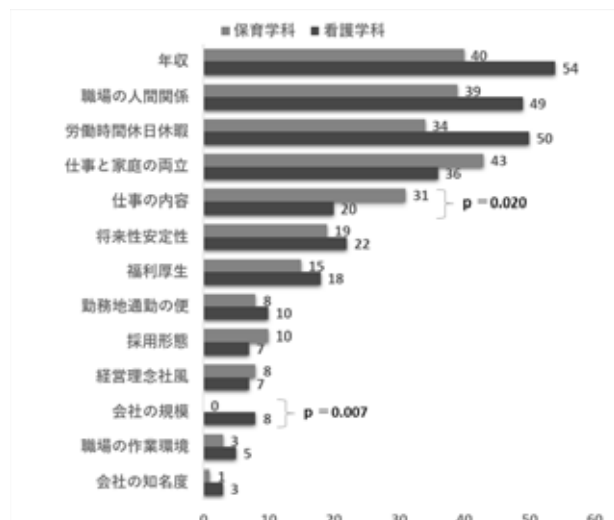


図 11 将来、職場選択に重要な点

10) 今後、聞きたい内容（図12）

今後、聞きたい主な内容は、「仕事と家庭の両立と制度」「児童虐待の対策」「子育て支援策」であった。

保育学科に比べ看護学科の方が、「少子化の現状と課題」を聞きたいとした割合が高かった。

11) ライフデザインイメージに関して

イメージすることができた、少しできたとした割合は90%以上であった（図13）。

12) 今回の講演の評価（図14）

大変良かった、良かったとした割合が90%以上であった。

13) 今後の方向性（図15）

今後、このまま続けた方がよいとした割合が90%以上であった。

14) 講演の感想

表1-1, 1-2, 1-3に、講演の感想について、質的にカテゴリ化したものを示す。

コードは「133」、サブカテゴリは《93》カテゴリは<72>、コアカテゴリは【14】抽出した。

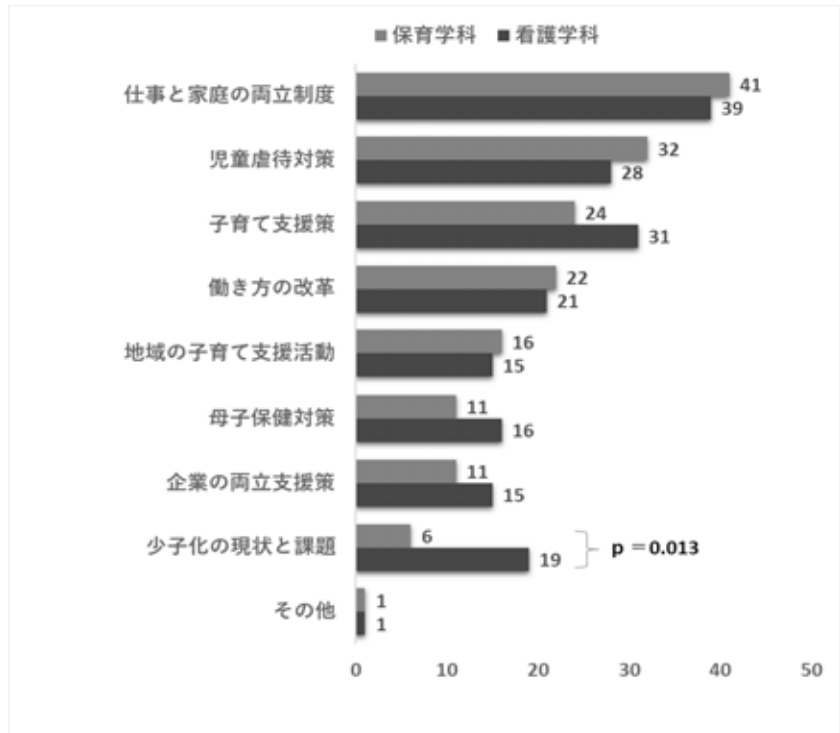


図12 今後聞きたい内容

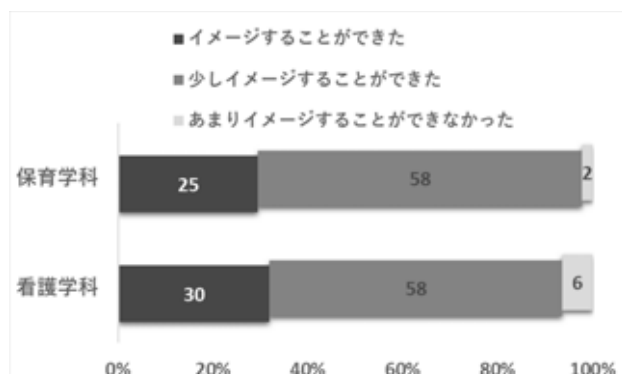


図13 今後のライフデザインのイメージができたのか

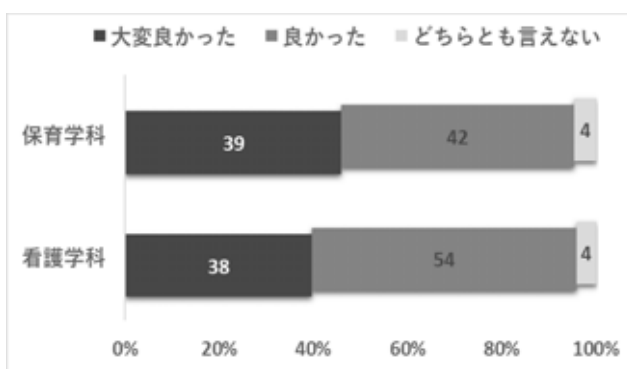


図14 今回の講演の評価

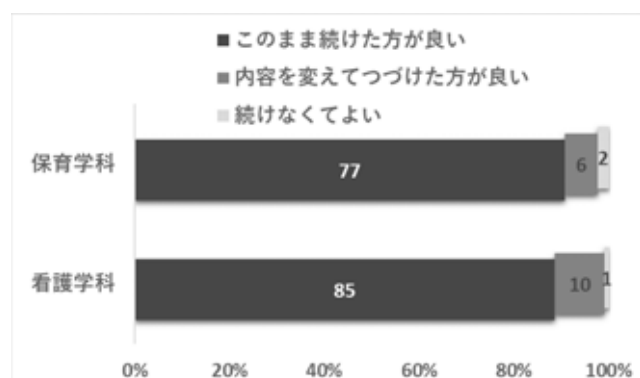


図15 今後の方向性

表 1-1 講演の感想カテゴリ

サブカテゴリ 《93》	カテゴリ <72>	コアカテゴリ 【14】	
子育ての問題を理解できた	子育て支援の考え方、孤立防止の現状など知らないことを知り、理解した（6）	子育て支援の現状と課題、考え方を知り、重要さを理解し、行動することが大切である（24）	
知らないことを知れた			
子育てについての考え方を学ぶ			
母親の孤立防止の現状を知る			
支えの自覚、沿われ、孤独ではないことが支えになる			
北海道で1番人口が集中している札幌市の現状を聴けて良かった			
子育て支援を知ることができた（2）	子育て支援を知り、重要さを理解した（4）		
子育て支援の重要さを理解した（2）			
子育てには人とのつながりと周囲の協力が大切である（2）	人とのつながり、周囲の協力、子育て支援は大切である（3）		
子育て支援の大切さを実感			
母親の置かれている現状を理解できた	子育ては大変で母親の置かれた現状を理解した（2）		
子育てはとても大変だ			
現在の虐待状況など、問題がわかった	虐待などの現状を学ぶ		
子育てをしていく上で、楽しみや喜び、またその反対の悩みや不安というものも出てくる	子育てをしていく上で、楽しみや喜び、悩みや不安も出てくる		
授業で「地域の子育てで、地域とのつながりが大切」と何度も学び、実際に地域活動の大切さを子育て支援センターでの実習で感じた	地域活動の大切さを子育て支援センターでの実習で学ぶ		
今の日本がどのような状況か、どんな課題があるのか知ることができた	現状と課題を知る		
現代の社会の課題をふまえ、子どもや育児について考えていかなければならない	現代の社会の課題をふまえ、子どもや育児について考える		
今日のお話を聴けて、より理解を深められた	講演を聴き、理解を深めた		
子育ての環境についてわかった	子育ての環境がわかった		
「立ち話をする人はどのくらいいますか？」という質問に、「いる」との回答が少なく、立ち話レベルでも少ないと驚いた	立ち話の地域交流も少なさに驚く		
現状を知り、どうすればいいのかを考える、そして、行動することが大切	現状を知り、どうするか考え、行動することが大切		
ありがとうございます（7）	忙しい中来てくれてありがとうございます（10）		講師に対する感謝（10）
お忙しい中ありがとうございます（2）			
名寄まで来ていただき本当にありがとうございました			
勉強になりました	将来活用できる有益な内容を学ぶ（3）	将来の自分の学び（不安の軽減・薬・益）となり、活用したい（9）	
将来利用する可能性が十分あるため、とても有益なことを聞けて良かった			
将来の自分自身に関係するので、勉強になった			
将来の自分の子育てについてイメージが持てて楽しかった	将来の自分へ、子育てイメージを持ち、		
自分が親になった時にこういう制度を活用できたら心強い	制度を活用できると心強い（2）		
将来親になる不安が薄れた	親になる不安が薄れた		
とても将来の自分の薬になった	将来の自分の薬になった		
これから様々な人々と関わっていく上で、今回教えて頂いたことを上手に使っていきたい	今後、関わりの中で活用したい		
子育ての支援が増えてきていることを知って、自分に将来子どもができれば十分に活用したい	将来子育て支援を活用したい		



表 1-2 講演の感想カテゴリ

サブカテゴリ 《93》	カテゴリ<72>	コアカテゴリ 【14】
地域子育て支援拠点で、親子と他の家庭のつながり・交流は とても大切である	地域子育て支援拠点は親子の他の家族と の交流、繋がり、助けてと言える場所 であり、大切である (2)	今後、子育て支援はさらに必要 となるため、利用できる環境 づくり (他職種連携含 む)、思いが共有でき、子ど もが生活しやすい環境が大切 で、支援場所が増えてほしい (9)
困った時に助けてと言える場所		
同じ境遇にいる人々が繋がる場として支援していけるような 場所がもっと増えると良い	同じ境遇の人々が繋がる場として支援す る場所が増えると良い	
このような居場所が増えてほしい	こんな居場所が増えてほしい	
保育を学んでいるから、赤ちゃんや子どものことを他の大学 に進学した人よりは知っているが、友人も子供がいるので、 子育て支援で利用できる環境づくりが大切である	子育て支援で利用できる環境づくりが大 切である	
子どもが生活しやすい環境も周囲が創っていくことが大切だ	子どもが生活しやすい環境も周囲が創っ ていくことが大切だ	
看護師などが大変な時、助けを呼べたり、お互い助け合える 環境はいい	職場内他職種連携の環境が良い	
思いを1人で抱えず、話を共有できる環境は素晴らしい	思いを共有する環境が良い	
今後、さらに、子育て支援は必要になる	今後 子育て支援は必要	
たくさんの親子が救われてほしい	多くの親子が救われてほしい	
支援について知らない世代も多い	子育て支援について知らない者へ周知し 利用してもらうことが重要である (2)	子育ての大変な当事者に伝え る (8)
孤立化し子育てに苦しんでいる親子に支援するシステムがあ ることを周知し、利用してもらうことが重要である		
子育ては当事者は周りが見えなくなっていることがあるの で、そうした人に伝えられるといいな	子育ては当事者は周りが見えないことが あるため、その人に伝えられると良い	
こういった支援があることを多くの子育て家庭へ伝えられ る	これらの支援を多くの子育て家庭へ伝え ると良い	
子どもを産む前から、このような講座をぜひ聞いてほしい	他者への講座の勧め	
子育て支援の紹介のこのセミナーがなかったら知ることがで きなかった	この機会を知ることができた	
将来親になった時、こういった考え方を知っているのとい ないのでは、心の支えられ方が大きく異なる	子育て支援の考え方を知る・知らないで 心の支援が異なる	
相手の立場に立ち、よりよい支援を行うためには多くのこ とを学び続けることが必要だ	相手の立場に立ち、よりよい支援を行う ために、学び続けることが必要だ (2)	
必要な支援ができるように学びたい		今後、職業人として、親とし て、国民の一人として、相手 の最大な理解者になるよう少 子化や子育てについて考え、 自己研鑽 (視野拡大・興味関 心の喚起など) の継続が必要 である (7)
対人援助職としても、親になるかもしれない自分としても、 これからも学ぶことが多々ある	今後、職業的にも、親としても多くの学 びが必要	
親と子どもの最大の理解者であれるよう学びを深めたい	親と子どもの最大の理解者であるため、 学びを深めたい	
今回学んだ事を活かし、少子化や子育てについて考えてい きたい	少子化や子育てについて考える	
自分の視野を広げるため、興味がない分野の話も聞いてみた い	自己の視野拡大と興味関心の喚起	
保育者になるからではなく、国民の1人として支えていく	国民の1人として支える	
子育ては経験してみないと大変さが分からないため、未婚 の人々が理解する、行動に移すにはむずかしい	未婚の人・興味のない人が理解し行動に 移すのは難しい	
自分が結婚や出産に興味がないので、自分の将来のイメージ をすることはあまりできなかった	自分の将来へ、興味がないとイメージで きない	未婚、興味がない、乳児と触 れ合い経験の不足、知らない 人は不安と思わず、イメージ もできず、理解しにくく、子 育て行動に移すのは難しい (5)
知らないものであまり不安に思ったことはない	知らないもので不安に思わない	
乳児と触れ合う機会がなく、子育てするのは難しい	乳児と触れ合う機会がなく、子育ては難 しい	
現代、近隣住民との交流不足などがあるが、私の周りにはな く、実感として考えられない	人との交流不足など自身の周囲にない と理解しにくい	

表 1-3 講演の感想カテゴリ

サブカテゴリ 《93》	カテゴリ <72>	コアカテゴリ 【14】
たくさんの情報と経験と共に講座がすすみ、とても説得力があり、納得でき、楽しかった	講座は情報と経験と共にすすみ、説得力があり、納得でき、楽しい	具体的に分かりやすく、理解でき、楽しい授業/一部、内容の難しさあり (5)
わかりやすい講義で理解できた	講義はわかりやすく理解できた	
法律や地域で行われている支援が細やかに書かれていたの で、とてもわかりやすく、勉強になった	法律や地域の支援が細やかに書かれ、わ かりやすく、勉強になった	
実際に子育てをしたことがある講師の話から子育ての大変さ を具体的に学べた	子育ての大変さを具体的に学ぶ	
内容が少し難しかった	内容が少し難しい	ライフデザイン・子育て・親 理解の機会 (5)
早くから考える一機会になる	早くからライフデザインを考える機会と なる (2)	
まだ先と深く考えていなかったが少し理解できた	子育てについて深く考えることができた	
子育てについて深く考えることができて良かった	自分のこれからの人生を考えることがで きた	
自分のこれからの人生についても考えることができた	自分のこれからの人生を考えることがで きた	日本の子育て政策は甘い が、国家・地域の支援は心強い (5)
人とのつながりが薄れた世の中で、地域社会がどのように関 わるか考える	希薄な対人関係の社会での関わり方を考 える	
親の偉大さ・大変さに気づく	親理解の機会	
子育ての相談をできる人が身近におらず、不安を抱えている 人にとって、地域の支援してくれる存在は、とても心強い	地域の支援は心強い (2)	
引っ越しを期に、地域との付き合いが全くない状態で子育て を行わなければならないという状況もあるため、このような 取り組みはとても良い	直接子育て支援に関った経験がある	子育て支援の活用で子育ての 暗いイメージ（孤独・辛さ） が払拭し少子化問題が改善す る (4)
授業で子育てセンターに行き、今までより直接子育て支援に 関わられた	地域・国家の協力が必要である	
子育てには地域・国家の協力が必要である	日本の子育て政策は甘い	
日本の子育てに対する政策はまだ甘い	てんてんなどの子育て支援の施設の利用 が、一般的なものになることで、子育て の孤独や辛さなどの暗いイメージが払拭 され、少子化問題も改善される	
保育所だけではなく、てんてんのような子育て支援してくれ る施設の利用が、もっと一般的なものになっていくことで子育て に対する孤独や辛さなどの暗いイメージが払拭され、少子 化の問題も改善されていく	子育て中の孤独感が緩和することで、子 育てに対する自信や次の子どもを作るこ とに繋がる	講師の言葉のメッセージは印 象深く、育児支援のあり方 (協力・機会づくり、他者理 解、相談の勧め)を学ぶ (4)
子育て中の孤独感が緩和することで、子育てに対する自信や 次の子どもを作ることに繋がる	子育て支援で少子化対策になる	
各地域で支援をすると少しずつでも少子化対策になっていく 孤独が心的ストレスに繋がるため解決する	孤独の解決	
「自分がしてあげたいことと、相手がしてほしいことは違 う」この言葉は大事だ	「自分がしたいことと相手がしてほしい ことは違う」「自分一人で支援するの ではなく、人との関わりの機会を作るだけ でいい」など、経験に基づく言葉はメッ セージ性が強く印象に残る (2)	
「無理に自分だけで支援しようとせず、人と人との関わりを 作るきっかけだけ与えるだけでもいい」この言葉は印象に 残った	子育ては協力が大事	子育て支援団体を知る (3)
子育ては、開放的に地域の人々の力も借りて協力することが 大切だ	相談の勧め	
子育てが大変と感じたら相談することが大事だ	札幌の子育て支援（かざぐるま）を知ら なかった (2)	
札幌でこのような子育て支援を行っていることを全く知らな かったの、勉強になった	保育園以外の支援団体を知った	
札幌にずっと住んでいたが、かざぐるまという団体があると 知らなかった	子育てを安心してできる取り組みが増え ている	子育てを安心してできる取り 組み、子育て支援が充実して きた (2)
保育園以外に子どもを預けたり、支援を受けられる団体を知 れて良かった	子育て支援の充実を実感	
様々な支援がされ、子育てを安心してできるような取組み が増えている	子育て支援の取り組みは良い	
子育て支援（働く・子を預かる）の充実を実感		
子育て支援で救われる人達がいる、子育ての面でも、地域社 会を作る面でも良い取り組みだ		



### 3. 考察

#### 1) 少子化対策としてのライフデザイン教育

少子化社会対策基本法に基づき、少子化に対処するための施策の指針として2015年「少子化社会対策大綱」が策定され<sup>1)</sup>、「将来のライフデザインを描けるようにするために、その前提となる知識・情報を適切な時期に知ることが重要である」とライフデザイン教育の重要性が謳われている。

核家族化が進んだ今、大学生が身近に受ける教育は、親の背中である。共働きが増え、国も女性の雇用を増やし、労働力を確保するための策を講じている。8割の大学生が少子化を問題と感じており、それは、親世代を将来施背負う経済的基盤の揺らぎを懸念したものであり、将来消滅する過疎化した市町村の報道に見るマンパワーの不足を外国の方で補おうとする国策からも実感していることと考える。

ライフデザインを構築するための情報提供として、今回は、子育て支援の内容としたが、このような機会を継続し、伝える努力をすることが大切である。少子化社会対策大綱の施策の具体的内容<sup>2)</sup>では、5年間の評価を行うとある。合計特殊出生率は2.0に届かず、晩婚化は進んでいる。各施策の具体的内容をみても、推進するとあるが、「具体的」施策の部分が見えてこない。今後、評価結果の動向に注視していきたい。

#### 2) 大学生のライフデザインイメージ

大学生は約5割以上の者が結婚し、子どもを持ち、親になる。親になる理由を自分の家庭を持ち、子どもが欲しいとした割合が6割以上いる。このように考えている大学生が将来、社会に出て一世帯を築きやすいような社会を構築する必要がある。

一方、親にならない理由に、「自由でなくなる」「他人と暮らすのが面倒」「自由にお金が使えない」という一人を謳歌し、経済的、人間関係の縛りを嫌う者がいる。そうなった背景には、個人の自由だけではない、これまでのその家庭のあり方に起因する何かがあるのか、また、愛する人と暮らすと回答したポイントの減少から「結婚が愛情だけでは割り切れなくなってきたことを示唆している」とした<sup>3)</sup>ものもあり、結婚に抱く思いの変化があると考えられる。

内閣府子ども子育て本部は、「若い世代の結婚の希望が叶うように環境整備が極めて重要であることから、結婚、妊娠、出産、子育ての各段階に応じた支援を切れ目なく行う」とあるが、結婚前の取り組みが見えない。大学生が捉えた現在の育児環境では、育児休業や両立することへの家族や配偶者の理解不足、保育サービスの不足、職場復帰に対する不安が挙げられており、職場選び、配偶者選び、各自治体におけるサービス選び、居住先の十分なリサーチが必要であること示している。

将来、大学生は、「結婚し、子どもを持ち夫婦で協力して子どもを育てる」と考えている者が多く、その育児のイメージは「楽しい・喜び・暖かい」などの明るいイメージと、「責任・難しい・忍耐」などの暗く重いイメージを併せ持ち、その基盤には親の子への愛情と夫婦の協力、安定した収入が基盤となることが示唆される。

#### 3) 保育学科と看護学科の比較

育児希望と赤ちゃんのふれあいの機会は、保育学科の方が看護学科よりも多く、「親のように生きる」では保育学科に比べ看護学科の方が多かった。その理由が明らかではないため、何故この差が生じたのかは不明である。看護学科の方が仕事に慣れてからの育児希望を考えるという出産年齢が影響しているのか、親が看護職で親の背中を見て、職業を選択した一要因であるのかなど、考えると枚挙にいとまない。

赤ちゃんのふれあいの機会について、保育学科は高校卒業以降が多い。看護学科では4年生での小児・母性実習で関わるため、アンケートを受けた学年では接触が少ないことが示唆され、また、大学におけるカリキュラムの違いが影響したことも起因すると考える。

次に、育児のイメージを「忍耐」とした者が保育学科に比べ看護学科の方が多く、「不安、孤独」とした者が看護学科に比べ保育学科の方が多かった。これは、保育学科の方が子どもとのふれあいや遊ぶという点で

保育士、幼稚園教諭のプロの視点で学ぶのに対し、看護学科は病気のケアという看護職の視点で学ぶ違いが寄与したと考える。

さらに、子どもが育つために大切なものに安定した収入とした者が保育学科に比べ看護学科の方が多く、看護学科は経済的側面の大事さを生活や医療保障の面からも思考したものと考えられる。一方、理解ある職場、生き方・働き方が相談できる大人の存在、地域の思いやりとした者が看護学科に比べ保育学科の方が多く、モデルとなる職場・大人の存在や地域社会に向けた思いやりなど、温かく迎える環境、将来に向けた示唆を示してくれる環境が大事であると実感していることが考えられる。

#### 4) 感想の質的分析

14のコアカテゴリから、主なコアカテゴリは【子育て支援の現状と課題、考え方を知り、重要さを理解し、行動することが大切である (24)】【講師に対する感謝 (10)】【将来の自分の学び (不安の軽減・楽・益) となり、活用したい (9)】【今後、子育て支援はさらに必要となるため、利用できる環境づくり (他職種連携含む)、思いが共有でき、子どもが生活しやすい環境が大切で、支援場所が増えてほしい (9)】【子育ての大変な当事者に伝える (8)】などであった。この講義を聴講したことで、子育て支援の現状と課題を知り、将来の自分に置き換えて活用できる内容であることと、子育て支援を必要とする当事者に伝えたいという思いがあり、講師の経験に裏打ちされた言葉が印象に残り、今後の方向性として自己研鑽まで指向することができ、子育て当事者、関わる他職者、親、友人と他者理解を深めることができると考えられる。

#### 4. まとめ

- 1) ライフデザインを構築するための情報提供として、大学としてテーマを選択し、継続して伝える努力をすることが大切である。
- 2) 大学生のライフデザインイメージは、「結婚し、子どもを持ち夫婦で協力して子どもを育てる」と考えているものが多く、その育児のイメージは「楽しい・喜び・暖かい」などの明るいイメージと、「責任・難しい・忍耐」などの暗く重いイメージを併せ持ち、その基盤には親の子への愛情と夫婦の協力、安定した収入が基盤となることが示唆される。
- 3) 保育学科と看護学科の違いは、赤ちゃんのふれあいの機会や時期、カリキュラムの違いによることが考えられる。
- 4) 子育て支援の現状と課題を知ること、学生自身に置き換え、将来、職業人として、また、一個人としての関わり方、子育て支援のあり方を考える機会とすることができる。

#### おわりに

本学、2学科のライフデザインイメージの特徴とライフデザインに関する情報提供の必要性について述べた。今後も道とのライフデザインに関する事業を継続し、情報提供の一機会とできるよう、また、学生のこの活動に関するニーズ調査の結果から、さらに、方法と内容を検討し、より学生のニーズに即した活用できるものとしていきたい。

このライフデザインゼミの開講にご協力いただきました株式会社インサイト奥田正克様、調査にご協力くださった学生の皆さまに心より御礼を申し上げます。

#### 付記

本稿は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターと道の主催事業である。

## 引用文献

- 1) 内閣府男女共同参画局公益財団法人日本財団学(2015)行政施策トピックス3、共同参画、5、10 ページ-11 ページ
- 2) 少子化社会対策大綱;内閣府 [www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/taikou2.html](http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/taikou2.html) (2018. 11. 12 閲覧)
- 3) 矢口和宏(2001)若年世代と老後の不安、Life design report. 39-42、第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部

## 参考文献

- 1) 的場康子(2016)少子化対策としてのライフデザイン教育を考える、Life design report. 39-42、第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部
- 2) 北村 安樹子(2017)未婚者の結婚意思とライフコース、Life design report , 25-28, 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部
- 3) 江崎正志(2013)高校生・大学生にとってのライフデザイン、Life design report summer , 1-2, 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部
- 4) 山口公正(2011)ライフデザイン普及・啓発活動はなぜ必要か、Life design report winter , 1-2, 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部
- 5) ライフデザイン白書 2015、株式会社第一生命経済研究所編、ぎょうせい
- 6) 江崎正志(2016)「ライフデザイン白書」のデータを掘り起こしたレポート、Life design report spring , 1-2, 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部